

「形だけの自由」を超えて

岐阜市立加納中学校 3年

馬場 唯花

今、私たちの社会は、大きな変化の中にあります。

「ジェンダーレス。」性別による壁をなくし、誰もが自分らしく生きられる社会を目指すこの言葉は、今や時代の合言葉のようになっています。このような「多様性」を認め合おうとする考えに、反対する人は多いでしょう。

しかし、その理想を追い求めた結果、制度や形だけで、私たちは大切な何かを置き去りにしてはいませんか。

中学に入ったばかりの頃、私は当たり前のようにスカートを履いて登校していました。けれど、鏡に映る自分の姿を見るたびに、言葉にできない強い違和感がありました。どこか恥ずかしくて、落ち着かなくて、周りからの視線が気になってしまい、次第に自信をもつことができなくなっていました。

そんな私を救ってくれたのが、学校のスラックス選択制でした。初めてスラックスを履いて登校した日、感じたのは圧倒的な「安心感」でした。そのとき女子でスラックスの生徒が少なかったので、まだ周りに何か言われるかもしれない、という不安はありました。しかし、友人たちが「カッコいい」「似合ってるよ」と、ありのままの私を肯定してくれて、それが何よりの支えになり、私の中に大きな自信と勇気が生まれました。スカートを履いていた頃の私からは想像もできないのですが、仲間からの応援もあり、私は二年生で、生徒会長として大勢の人の前で堂々と話せるまでになったのです。あるとき女子の後輩に「唯花さんの姿をみて私もスラックスを履くことを決めました。」と言われたことがありました。自分で選んだ一歩が、誰かの背中を押していたことがとにかくすごく嬉しかったです。

この経験を通して「自分らしくいられる選択肢がある。」それがいかに人を輝かせるか、私は身をもって知りました。だからこそ、今進んでいる「多様性」という、誰もが個性を認め合おうという社会の流れを、私は素晴らしいと感じています。

事実、文部科学省や制服メーカーが行った調査でも全国の多くの学校でスラックスが導入され、私のように救われている学生が増えているという声があるようです。しかし、その一方で、今の私はある「戸惑い」も抱え始めています。形だけの自由が進むことで、逆に「安心」が置き去りにされているのではないかと、感じるからです。

例えば、私たちが普段使っているトイレはどうでしょうか。もし私が女子トイレに1人で入った時、目の前に男性の姿をした人がいたら、私は反射的に恐怖を感じるでしょう。みなさんはどう感じるでしょうか。でも、その方の心は女性かもしれません。個性を認めようと願う一方で、恐怖を覚える自分は、差別をしていることになるのでしょうか。相手を尊重したい「理想」と、自分を守りたい「本能」。この2つの感情が、私の中で激しくぶつかり合っています。

実際に、東京の商業施設では多様性を目指して性別を問わないトイレが設置されましたが、利用者の不安の声が多く、結局わずか数ヶ月で仕切りが再設置されるという出来事がありました。これは、「理想」が、私たちが本能的に持つ「安心したいという感覚」を置き去りにしてしまった結果ではないでしょうか。

制度や形だけを急いで変えても、誰かが不安や恐怖を感じているなら、それは本当の意味で「優しい社会」とは言えないはずです。では、誰もが自分らしく、そして安心して過ごせる社会は何を大切に、つくっていけば良いのでしょうか。

それは、特定の誰かが一方的に我慢したり、自分の正解を押し付けたりすることでもありません。まずは自分の「心地よさ」を大切にしながら、同時に、立場が違う誰かの「不安」にも耳を傾ける。そうした一人ひとりの少しずつの「許容」と、立場が違うもの同士での「対話」を、粘り強く重ねていくことなのだと私は考えます。

理想と現実の間で迷いながらも、私たちがお互いに許容と対話を諦めず歩み合うこと。それが、誰もが安心して輝ける未来へつながると、私は信じています。